

## 極楽寺遺跡出土の飾玉類

藤田 富士夫

(富山市考古資料館学芸員)

富山県中新川郡上市町極楽寺に所在する極楽寺遺跡は、北陸の縄文前期初頭の「極楽寺式土器」のタイプサイトとして、また白馬岳を中心として分布する滑石製飾玉の攻玉遺跡のうちでも、最古の類に属し、なおかつ多くの飾玉類の出土を見ることでも著名である。昭和38年には発掘調査も行われ、その内容を一層明らかにしている(注1)。ここでは、私が数年来採集してきた飾玉の紹介を試み、併せて若干の私見を開陳し大方の御批判を乞う次第である。(なお本紙に紹介の機会を与えられ、また終始暖かい御助言を賜った山内清男博士に心から謝意を表する次第である。)

### (一)

極楽寺遺跡の飾玉類の大概をみると、1、所謂玦状耳飾、2、石環、3、管玉状飾玉、4、勾玉状飾玉、5、ペンダント様飾玉、とがある。そして、これらの末製品及び原石と思われる滑石塊の出土が著しい。

ここに紹介するものは全て「極楽寺式」(花積下層式併行)期のものとして、一を除き把握できる。

各々についての内容をみると、先ず玦状耳飾が出土の主体を成す(第一、第二、第三図版)。その殆どは、欠損せるものである。形態をみると、円形のもの、楕円形のもの、角張ったものがある。その断面は、長方形、円形、梯形を示す等種々ある(注2)。

管玉状飾玉に切目を入れたもの(第二図版6、7)や、あるいは脚部側辺に刻みを施したもの(第一図版11)、従来補修孔とも称せられてきた孔をいくつかもつもの(第一図版7、15)、そして欠損品と思われるものの欠損部を研磨したもの(第一図版18、19)がある。完形品及び切目をあとわずか残しているものの出土も見られる

(第一図版1、2)。また切目とは別の部分を擦り切ろうとしたもの(第一図版17)がある。

石環状のものについては、玦状耳飾への一工程と見る説もあるが、ここでは結論を急がずに、一応別に扱った(第一図版20~24)。形は円形を基本としている。なかには仕上げ研磨が成され、断面が一方に傾斜したものもある、また図示した最小の石環に切目を施した様な玦状耳飾が存在するは注意されてよい。

管玉状飾玉は(第二図版1~5)、管の長さが略1.5cm前後のもの多く、稀に2cm大のものも存する。またその形は中脹みのものや、角張ったもの等がある。断面を見ると、方形を示すものや、長楕円形を成すものがある。また、この管玉状飾玉に縦に切目を入れ、柱状玦となったものもある(第二図版6、7)。

勾玉状飾玉(第二図版8~11)については、玦状耳飾の欠損品の転用か否かは、明らかではないが、いずれも研磨良く、また孔を有している。その中には孔が頭部にではなく、腹頸の方向に穿たれているもの(第二図版10)があり、また玦状耳飾の欠損品転用であろうか、勾玉状に作出した末製品とも思われるもの(第二図版8)がある。さらに第二図版22は本遺跡唯一の硬玉製勾玉である。しかしこれについては、形態等から見て、後出的なものとも考えられる。発掘調査に於いて縄文晩期初頭の土器片数個も発見されており、或はこの期のものかと思われる。

ペンダント様のもの(第二図版15、16)は、ここには側辺に刻みを有する長形状のもの、不整楕円状で小さな点刻をいくつか施しているものを示したが、この他に三角状の、孔を有した飾玉もある。このうち15に酷似したものが、最近竹内俊一氏等によって発見された富山県朝日町明石

A攻玉遺跡で出土しており(注3)、この期の飾玉のセットを成すものかも知れない。

## (二)

以上の飾玉類の工程を示す末製品と思われるものの出土が多数ある。どれが最終的に何になるかについては、種々の様相を示しているので即断はし難い。円筒状のもの(第二図版 13、14、18)は、管玉状飾玉へ、円盤状のもの(第三図版 4~7)は、石環あるいは塊状耳飾へと移行していくのは認識し得るが、しかしそれ以外のものについての判定は困難である。それについての一助として、その作出の基本について一瞥してみたい、その手順を知ることによって理解し得ると考えるからである。第二図版 17、18、20、21の擦切り痕を有する、あるいは擦切ろうとしている製品に注意したい。この擦切り痕は詳細に検討してみると、全飾玉類の擦痕と一致する。このことは今日荒磨きと称している飾玉類製作の工程の、観察が、少くとも縄文前期初頭に関しては、誤りであり、また今日まで穿孔は荒磨きが行われた後で成されるという認識が成されてきたことについても、それは荒磨きと称してきたこと自体が基本的な形態作出の手法の痕跡であることからすると至極当然のことと言わなければならない。ここに於いて荒磨きという概念を擦切りに変えたい。そして今は、その製作に於いての研磨は従来の仕上げ研磨のみが成されることとなり、それは擦切り痕を消すことが主目的となり、それと共に修正研磨の意味を有するものであろう。また第一図版 5、18、22に見られるように僅かと思われる部位をも擦切ろうとしているものがあることからして、単に研磨するより擦切ることによる整形が多く成されていたかとも推定される。またこの擦切り手法は破損品の再生をも容易としているように思われる。一部分に穿孔の痕跡を有しているものが見られる(第一図版 22、第二図版 1、17)。その擦切りは、“≡”の擦痕があれば、その工具は左右に作動さ

れながら↑または↓の方向に移動したことを示している。そしてその擦痕は工具の作動が一時休止されたとき、あるいは擦切り方向を若干なりとも変えたときに生じたものである。その工具に関しては出土遺物中には、関係あると思われるものが見い出せず、種々の擦痕の観察及び第三図版 10の弯曲した擦切り開始痕等よりして、ある程度の弾力性を有する有機質のものではないかと思っている。擦切りの方向についてはまわりから原石の中心に攻めるように成されたもの(A)と、一定方向に成されたものがある(B)。塊状耳飾、円盤状のものについてみると、表裏共にAによるもの、Bによるもの、AとBとの組合せをもつものがあり、Bによるものでは表裏方向の同じものと異なるものがあり、またその側面については縦位、即ち円盤状の両面に直角に成されたものが多いが、他に横位に成されたもの、斜位のものがあり、稀には混合したものもある。

末製品中には三ヶ月形のもの(第三図版 12)や、長方形に作出したもの、あるいはその他不整形のものなどが見られる。それらの中には擦切られたまま不用な部分、即ち捨てられたものも含まれているだろうと思われる。

この様な複雑多岐な製作技術を踏まえた上で、これら末製品の評価意味付けが成されねばならないが、現在の所資料が充分と言えずまた私の考察も充分とは言えず、一つの問題を提起するだけにとどめたい。

## (三)

玉類の穿孔に関しても、今日まで廻転運動によるという認識が成されてきたが、それについての本資料は廻転運動の他に、反復様削除法(注4)によるものの存在を示している。即ち、孔は廻転運動ならば円形を基本とするが、ここでは半円の様な形を示し、なおかつ削り除かれたような相を呈する。そして孔壁の螺旋状痕も不規則なものが多い(例へば、第一図版 14)。また穿孔にあた

って、いくつかの単位を連結させたものがある(第一図版 22、第二図版 15、16、第三図版 2、3他)。また塊状耳飾で穿孔が、擦切り移動によって、即ち擦切りながら、その方向を次第にかえながら穿孔を行ったと思われる縦に条痕が走るものがある。また、第一図版 7の小孔、及び第二図版 23の如く管錐の存在をも疑わせるものがある。

#### (四)

第三図版 16~19のパステル型石製品(注5)についての概略を述べると、長さ3cm余、径5mm前後で、両先端、あるいは一方が丸みをおび、基本として円筒状を成している。石質は滑石及び粘板岩質のものを用いている。これ等は本遺跡の飾玉中やや特異な感を与える。この石製品については寺村光晴氏は石墨状飾玉として、報告されている(注6)。この製品は、私の知る限りでは、富山県小杉町瑞穂農場(注7)、同上市町広野新(注8)、同朝日町浜山玉作遺跡(注9)、富山市北代(注10)、糸魚川市出(注11)、長野県美麻村女犬原(注12)、青森県木造町亀が岡(注13)、盤城市寺脇貝塚(注14)等があり、必ず穿孔製品(石製飾玉類や骨角製垂飾具)の出土を見ており、しかも硬岩や粘板岩を使用する等して、出土する飾玉類とは全く異質的である。ここに於いて私は、この石製品を穿孔装身具と常に有機的な関係を持ちながら、しかも飾玉等には成り得ないもの、つまり工作具の一種(孔壁研磨具?)として位置づけることによって攻玉の解明へと一歩近づくことができるかと考える。なお本製品は縄文時代前期以後、晩期さらに古墳時代にまで存在し、また幾つかの種類がある。本遺跡の発見品は、灰白色、黒色等を呈し、円筒部の一部分が特に磨りへったもの(18)も見うけられる。

#### (五)

極楽寺遺跡出土の飾玉類は全てが滑石製である。原石の多くは岩壁から破碎採取によるもので転石

は少ない。原産地については、白馬岳に求められると言う(注15)。また交易面については極楽寺遺跡で製作されたと思われるものが静岡県の本島遺跡から出土しているという(注16)、これ等についての今後の課題は、まだまだ多い。そしてまた塊状品で実用に耐えないと思われるものや、勾玉の起源についても、まだまだ多くの問題がある。

またここでは、このような高度な飾玉製作技術とも関連して、第四図版に示す様な片刃の斉一性の強い小型石斧をもつ。一面が平らに磨かれたドーム状の断面を示し、その使用痕を良く残している。石質は蛇紋岩製のものがみられる。繊細な石斧の多量の出土も飾玉生産に関連するのであろうか。参考のため、附記しておく。

以上、私が調べた範囲内での塊状耳飾の整形、切目作出等、全てが擦切りの手法によるものであった、そしてこの手法は本遺跡以外の遺跡出土のものについても該当するものが多く見受けられた。この遺跡は未製品、完成品等が多く、製作工程についての多の観察をすることが出来たわけである。

(終)

注1 小島俊彰「極楽寺遺跡発掘調査報告書」  
富山県教育委員会 1965。

注2 藤森栄一「塊状耳飾を出せる諸磯式遺跡  
(其一)(其二)」信濃考古学会誌第2年  
1号、2号 1930。

氏はこの中に於いて、断面からその製作の順序について論述せられているが、ここでは触れなかった。

注3 竹内俊一氏の御好意により実見した。出土土器は極楽寺遺跡と同じ様相を示し、塊状耳飾及び未製品を出土している。

注4 適当なものが見つからず、仮りに用いた。いづれにしる、今までの穿孔の概念とは異ったものとしなければならない。

注5 寺村光晴氏(文献注6)は石墨状飾玉として把握しておられる。ここでは、所謂パス

テルに類似していることからして、パステル型石製品と呼びたい。

- 注6 寺村光晴「縄文時代前期飾玉生産の一考察」  
和洋女子大学紀要12号抜萃 1967。
- 注7 山内賢一氏資料。
- 注8 藤田富士夫「富山県中新川郡上市町広野新遺跡の玉類」(未刊)
- 注9 竹内俊一氏の御好意で、宮崎小学校蔵資料実見。
- 注10 注7に同じ。
- 注11 寺村光晴「翡翠」養神書院 1968。110頁写真。
- 注12 文献注6に同じ。
- 注13 藤田亮策、清水潤三「亀ヶ岡」慶応大学文学部考古学研究室報告三 1957。小棒石器として報告。
- 注14 馬目順一「人工遺物」『寺脇貝塚』磐城市教育委員会 1966。小棒石器として報告。
- 注15 寺村光晴先生教示による。
- 注16 江坂輝弥「所謂硬玉製大珠について」銅鐸13号 1957。

#### (追想・附記)

この資料報告は、1970(昭和45)年に書いた旧稿である。このうち主に技術論は拙稿「玦状耳飾」『縄文文化の研究』7 雄山閣1983、に記したものの出発点となっている。

かつて、成城大学で教鞭をとっておられた山内清男先生の研究室へ出入りしていた部外者の私が薦めによって起稿したものである。最初の粗稿を自ら手直しして頂き、それをもとに書き改めたもので、言葉の言い回しに先生の口調を感じるところがある。パステル型石製品についての名称も先生による。現物をお見せしたところ、日本はもちろん諸外国の石墨コレクションを並べられ、「フランス?のパステルに似ているからこの名でいいでしょう」とおっしゃった。パステルは各国のものが一箱ごとあり、「趣味です」といっておられた。

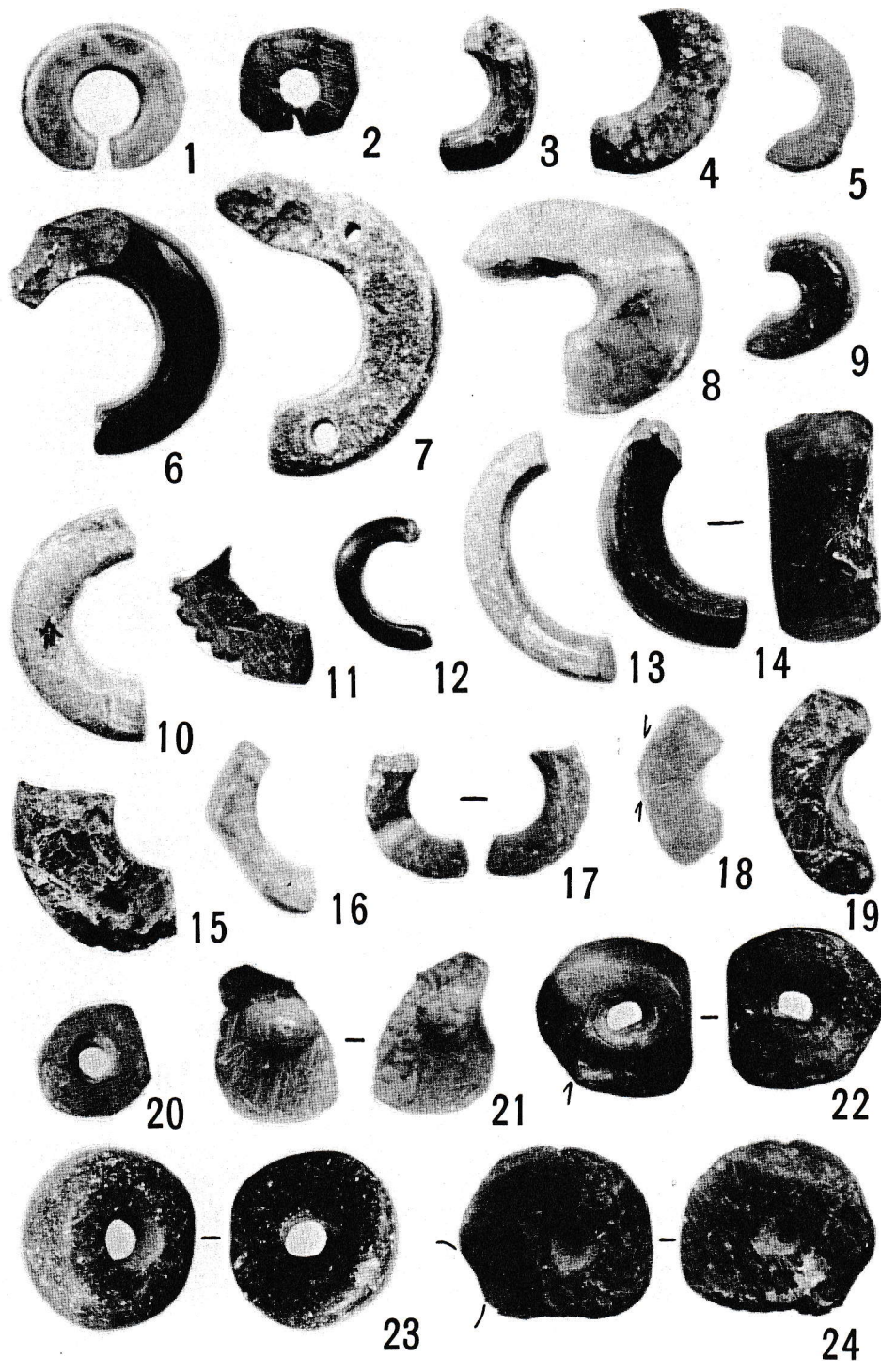
1970年の春先に二回目の清書を提出し、稿閲をお願いした。ところが、私が夏休みで郷里富山へ帰省していた8月29日、先生は忽然と他界されてしまった。年があけて、先生の奥様から主人の原稿を整理していたら出てきたといっ

て本稿を丁寧に返却された。

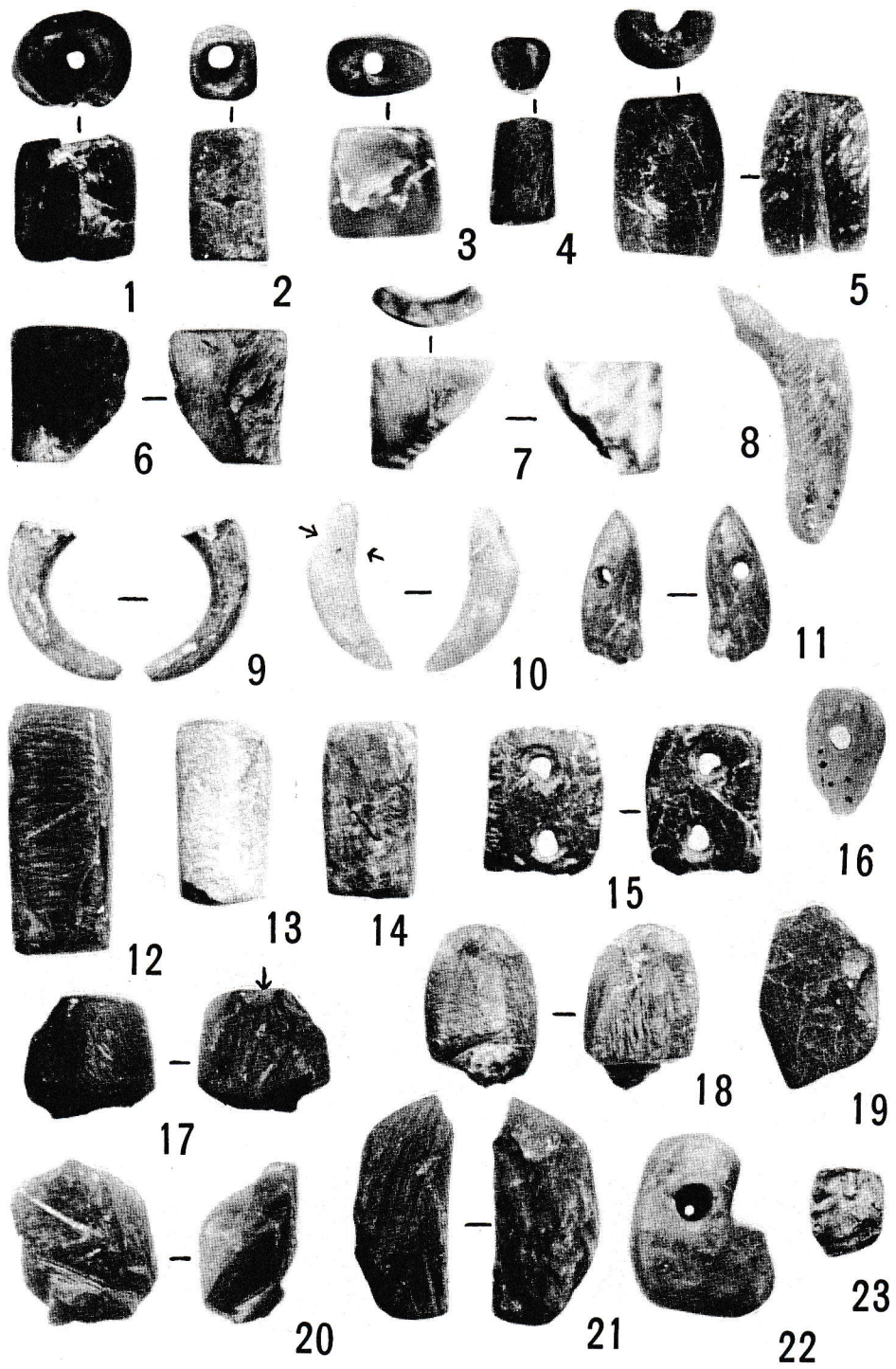
遡って7月下旬、帰省の挨拶に喜多見の自宅を夕刻お訪ねしたら、いつものやさしい眼差で閑談された。私が午前0時の新宿発で諏訪を経由して帰省するとお話しし、辞去しようとする、「まだ時間があるからもう少しいいでしょう」と引き止められた。御自宅を訪門すると、大体そんな次第であった。その時は、つい長居をし夕食をいただいたうえさらに列車の中でと夜食のサンドイッチまで御配慮いただいた。その先生が不帰の人となられるとは……、あまりに印象深い最後の先生の姿。思い出すことがあってこれを書いている今も胸がいっぱいになってくる。

晩年の先生は『日本先史土器図譜』の続編として『日本先史時代図録と研究』の発刊に意欲をもっておられた。これは1967年の『日本先史土器図譜』(復刻本)や山内清男・先史考古学論文集の旧第十一集(1969)、新第一集(1969)、新第二集(1969)の裏表紙に予告されているもので、「山内清男編輯」とあって主として特異石器について原稿を募ってまとめたいとお気持ちがあったように思う。その発刊に意欲をもたれ、そのための原稿だとお見せいただいていたもの二篇が論文集新五集に所収の「瀬戸内方面?の異形磨石斧」と「両尖匕首」である。

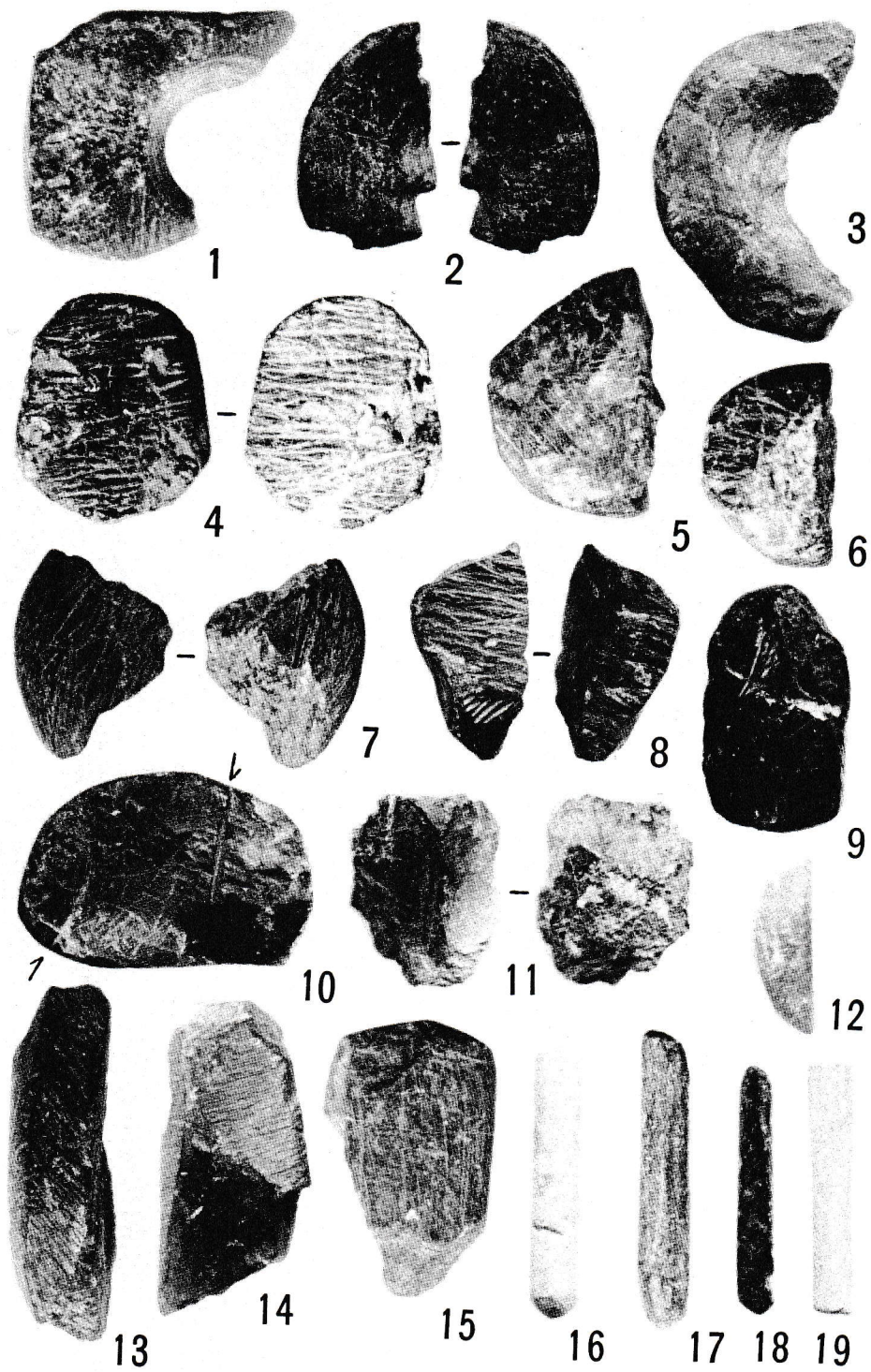
拙稿は『日本先史時代図録と研究』に登載したいということで、図版をその大きさに作成するよう指示されていた。今思えば、冷や汗の出る原稿であってさぞかし御負担をおかけしたであらうと思う。ここに拙文を掲載したのは、晩年の先生の関心事の一端を知っていただきたかったのと、十三回忌を過ぎた今急速に懐しさと思い出が頭をもたげてきたからである。



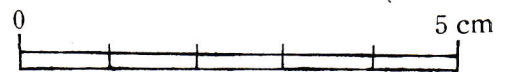
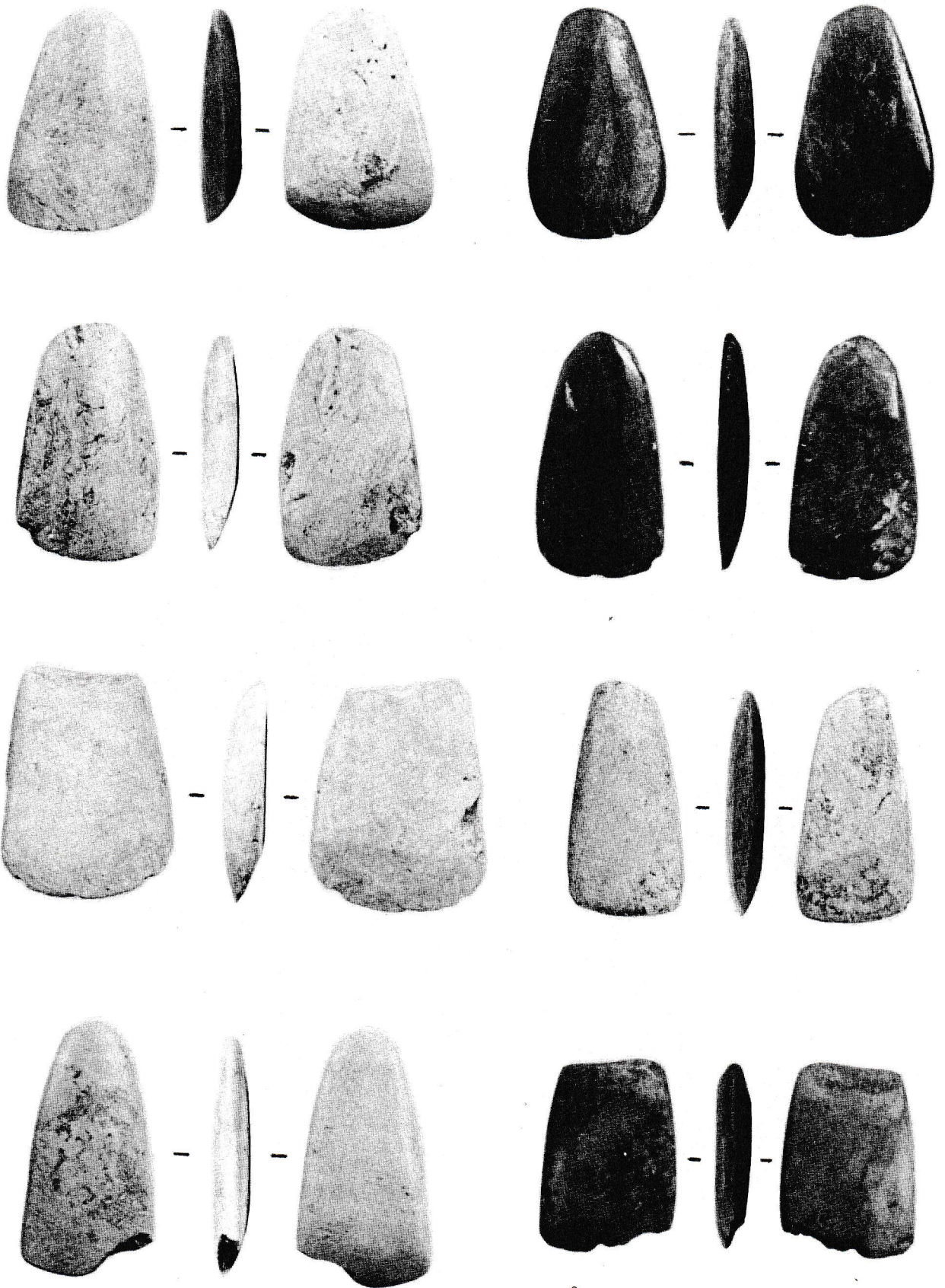
第一图版 (実大)



第二図版 (実大)



第三図版 (実大)



第四図版 (実大)